

透析医のひとりごと

「Long Slow Distance—故春木繁一先生を偲んで」—— 東間 紘

後期高齢者となった私の今の楽しみは、定年後に始めた自転車で気ままに走る自由な時間を持つことです。自転車に乗るとそれだけで気持ちがいい。顔にかかる風がうれしい。道を曲がるたびに変わる景色が楽しい。リズムカルな筋肉の収縮が心地よく、自然とのなんとも言えない一体感に、生きている喜びが弾ける。もっと長くもっと遠くへ、ゆっくりと時間をかけて、という旅へのあこがれは強くなるばかりです。こうした旅への思いを Long Slow Distance と呼んでサイクリストの心を捉えて離さないのは、フォークロックシンガー忌野清志郎のそれだが、私にはなぜか40年余の透析人生を全うされ一昨年お亡くなりになった春木繁一先生のお姿が重なって見えます。

1972年7月、私は透析療法開始直前の春木先生に初めてお会いしました。東大第2外科から東京女子医大に移ったばかりの恩師太田和夫先生が、腎臓病に関する『『ゆりかごから墓場まで』最先端の診療・研究ができる腎臓病総合医療センターの設立』という夢を実現すべく全国に公募した助手の2番手として私は九州から上京し、はじめて太田先生と一緒に病室をまわった時のことでした。そのときはほんの一瞬目を合わせ挨拶しただけでしたが、それ以来、春木先生は、私にとっては患者さんというよりは、大学は違っても医学部卒業が同期であり、一緒にインターン闘争を闘ったという同志意識もあって、むしろ移植患者や透析患者の精神・心理的問題のコンサルテーションをお願いする、頼りがいのある同僚としてのイメージでお付き合いをさせていただきました。

透析導入からかれこれ10年ほど経ったころだったでしょうか、先生には女子医大腎センターで透析患者や移植患者など、腎不全患者の精神的・心理的問題に対応した外来診療を担当していただいていた。外来診療が終わったある日、私は「お仕事がお忙しいのに、週3日の透析大変ですね?!」とねぎらいの気持ちで話しかけました。すると、「いいえ、透析の時間は私にとって、何物にも代えがたい、とつても貴重な時間なんですよ! 電話に出なくてもいい、誰からもなにからも邪魔されない、純粹に私だけ、私一人の時間です。こんな大切な時間が定期的に決まって取れるなんて! こんな自由がありますか?」と言われたのです。私は思わずまじまじと先生の顔を見返すと同時に、私の目からうろこがポロリと落ちるのを感じたのです。なるほど、いつももの静かで落ち着いた表情の先生の、マイナスをプラスに転じることのできる精神力の強さとこの楽天性にこそ、psychonephrology という前人未到のあたらしい医学領域を切り開いていく原動力を見た気がしたからです。

週に3日、先生にとって不可避な透析という心身の拘束された時間を逆にゆっくりと物事を沈思黙考する

ことのできる自由な時間へと転換するには、おそらく長く大変な血を吐く苦しみ、葛藤と努力があったことだと思います。それを40年余にわたって続け、「荷物を背負った人生」を「それなりの味にする」ことのできた精神の強さとがんばり、そして楽天的ともいえる大きく柔軟な人間力には感動を覚えるばかりです。まこと Long Slow Distance というのはこういう生き方をいうのではないのでしょうか。

サイクリストの喜びはヒルクライム、いわゆる坂登り、峠越えにあるようです。そして苦しみ抜いてようやく一つ峠を越えるとまた次の峠目指して漕ぎ続けたくなるといいます。自分の足で自転車をこぎ、いくつもの峠を越えて遠く旅をする気にサイクリスト達を駆り立ててやまないのは、歯を食いしばって漕ぎ続ける先にある達成の喜びであり、こぎ続けることによって初めて謳歌することのできる未知の世界がもたらす感動であり、手ごたえのある深い人生を生きる喜びではないのでしょうか。

できるだけ坂道を避け、せいぜい遠くても100kmくらいしか走ったことがない私には到底夢のまた夢でしょうが、しかし、そうした Long Slow Distance への密かなあこがれが、今も私をサイクリングへと駆り立てているのかもしれない。春木先生のご冥福を祈ります。

文献

春木繁一：荷物を背負った人生はそれなりの味がする。透析ケア；第6巻4号～第20巻9号連載。

戸田中央総合病院（埼玉県）